

梁啓超の變革説

—— 新民説を中心とした彼の革命觀 ——

上 田 伸 雄

Liang Chi-chao's (梁啓超) Theory of Revolution

—— On His Revolution-View based upon His "New-Chinese Theory". ——

Nakao UEDA

序

阿片戦争は英国産業資本を中国に導入する直接的な誘因である。南京条約は中国農村家内工業の代表的生産品たる綿布が英国製綿布により決定的な打撃を蒙るが如き低率関税を締結せしめられる。「従来の完全な孤立が古き中国保全の主要条件であつたのだ。が今やこの孤立が英国の媒介によつて武力的終末が惹起された」⁽¹⁾のである。外国資本は旧き中国を崩壊せしめる。而してこの崩壊過程に応じて伝統的イデオロギーも変化する。太平天国戦争はこの変化に応じた最初の近代的革命の性格を帯びた民族運動であり、更に「扶清滅洋」を唱導した義和团的行動は、たとへそれが大衆の支持を得た愛国的行動であるにしても⁽²⁾共に帝国主義的現実に対して真正面より対決せんとするものではなかつた。

かゝる排外主義に対して、これ等列強の重圧下に半植民地的支配を甘受する満洲王朝に対して打倒運動が起される。「扶清滅洋」に対する「排滿興漢」の運動がこれである。辛亥革命に連なるこの運動は孫文一派の三民主義の革命理論の出発点であり、民族主義を中心とせるものである。同じ排滿興漢の中孫文の主張せる共和制国家に対して、世界主義を主張し、異民族支配下の立憲主義を認める「変法自強派」が存在する。この主張は康有為、譚嗣同、梁啓超等によつて満洲王朝を容認する王制論となつて現はれる。

清朝末期の革新運動形態を以上の三つの形態

に大別し得るとすれば、異民族支配を認め乍ら欧米列強への排外運動のみによる形態が最も非現実的であるのに対して、一挙に満洲王朝を打倒し、共和制、社会主義国家を実現せんとする孫文一派も、幼稚なる当時の中国ブルジョアジーを背影としてはその目的達成の為には種々の制約が予想されるのは当然である。

これに対して変法自強派は、孫文と共に民族ブルジョアジー勢力を背影としながら、帝国主義との妥協の上に立憲君主制を主張する。この形態は後進国ブルジョアジーが常にそうである如くに、その民族資本の未熟さが外国資本との関係を対決ではなく服従を余儀なくせしめているからである。

変法自強派の中最も現実的である⁽³⁾梁啓超の変革論をとりあげ、転換期に於けるイデオロギーとして、彼の考へが如何なる程度に民族ブルジョアジーを代表するものがあるかを見んとするのが少論の趣旨である。

(1) マルクス・エンゲルス全集 6, 支那インド論

p.85

(2) 江口朴郎 義和團事件の意義 (歴史學研究アジヤの變革)

(3) 小島祐馬 中國の革命思想 p. 109

1. 中国革命史論

帝国主義の圧迫下に、倒れんとする満洲王朝の無能に依存することの不可能を知つた中国の有識者は中国新生の方法を種々の観点より論じた。即ち中国の近代化は先進諸国の學問、制度

に依らねばならぬことを認め乍ら、それを取り入れることによつて、中国伝統の道德、思想の崩れることを恐れる西体中用論者は、本体たる中国固有思想の不變を強調し、その上に西洋の學問思想を利用せんとするもので、これにより中国封建制を維持せんとする清朝上級官僚群のイデオロギーを代表するものである。

しかるに日清戦争の結果、清朝の実力は西欧學問技術の輸入による改良主義以上に、本体たる中国固有の社会制度の改革の必要が認められざるを得ない事態を惹起する。これを実践化せんとするのが変法自彊派の所謂維新運動であるが、康有為以下の清朝官僚群のイデオロギーでもあつた。

同じ変法自彊派に於いても、康有為、譚嗣同、梁啓超の論はそれぞれ独自の論を展開する。康有為のそれが公羊學派の流をくむ、従来の循環的史観に対して、發展史観に立つて、近代的革命の原理を見出そうとし、私有財産制に対する激しい疑惑を懐くことが指摘⁽¹⁾されているが、これを受継いだ譚嗣同が更にこれを現実的に実現の可能性を指摘し、中国の資本主義的發展の中に期待⁽²⁾している。

梁啓超のそれは、これ等兩者に対して、その論ずる所は現時中国政治の在り方を中心に論じ康有為の大同説⁽³⁾の如く一つの理論構成を為してゐない。前の兩者がそれぞれ理想社会を画きながら、その中に中国の現實を改革せんとするのに対して、梁啓超は過去の中国社会の分析の中から革命の方法、方針を見出そうとする。故に彼には革命理論、又は革命の理論的根拠よりも現實の中国社会に於ける革命成功の具体的方法が強く要求されている。

彼は従来の中国革命を次の如くに觀察する。

先づ彼は革命を次の三つの内容に区分する。

革命之義有広狭、其最広義則社会上一切無形有形之事物所生之大變動、皆是也。其次広義則政治上之異動、与前比劇然成一新時代者、無論以平和得之、以鉄血得之、皆是也。其狭義則專以兵力、向於中央政府者是也⁽⁴⁾

以上の分類に従ひ従来中国史上の革命を觀るに、所謂狭義の革命のみが存在し、且現時中国の革命を論ずるものもこの狭義の革命のみ主張し、滿洲王朝の打倒をもつて革命の最大使命としている。

然るに過去に於いて繰返へされた中国革命はその結果に於いては社会の進歩改造に益する所なく、これに反して、ヨーロッパ諸国の革命は失敗せる例多きに反して社会進化への貢献は大きい。この理由は何に起因するものなるか。それをヨーロッパ革命と比較し次の七点をあげて論考している。

(1)中国革命に於いては私人革命は存在するが団体革命は存在しない。英国クロムウエル革命、アメリカ独立革命、又フランス革命等を見るにこれすべて団体革命⁽⁵⁾である。然るに中国に於いては数千年來革命は絶えず続くが、革命指導の団体の見るべきものなく、例へば董貞之役、張角之天書、徐鴻儒の白蓮教、洪秀全の天主教更に哥老三合の徒に於いても、これ等を革命団体とは認め難い。一私人の団体の名に於ける革命である。これヨーロッパに於ける革命に比し最も相違する所である。

(2)中国革命には野心的革命は存在するが、自衛的革命は存在しない。元來革命の正義は自衛でなければならない。自らの権利を守る為に戦ふ所に革命の正義が存在する。然るに中国に於いては自衛の客觀的理由は存在せず、従来の史家これを主觀的にやむを得ざる自衛より生ずと為すも實は然らず。すべて野心家の自己を粉飾せんとする一手段でしかあり得ない。項羽が挙兵の際「彼可取而代也」と揚言せるは最もよき例である。

(3)中国には上等社会の革命は存在するが、中等社会の革命は存在しなかつた。ヨーロッパ社会に於ける革命の主体については

泰西革命之主動、大率在中等社会、蓋上等社会則其所革者而下等社会又無革之思想無革之能力也⁽⁶⁾

と述べ、中等社会がヨーロッパ社会革命に於ける主体的な階級を為してゐたことを述べ、これ

に反して中国に於いては上等社会が革命遂行の主導者たることをあげて革命の失敗理由とする彼の所謂上等社会とは

本朝任一方鎮擁土地人民以為憑藉者、皆謂之上等社会⁽⁷⁾

の意である故に、中国社会に於ける土地を私有し人民の上に鎮座する支配階級を意味する。即ち中国の革命は支配階級間に於ける支配権の争奪に終始せるのに対して、ヨーロッパに於けるそれは常に中等社会⁽⁸⁾によつて遂行される。これは蓋し革命の最大原因は生計の問題と重大な関係あり、この故に中等社会が生計問題を中心とし革命遂行の主体的な階級勢力たり得るとしている。⁽⁹⁾

(4)中国革命はその内容が極めて複雑な要素が交錯しているのに対して、ヨーロッパ社会に於けるそれは単純である。中国に於ける秦末革命西漢革命、東漢末革命、隋末革命、洪楊之役等一度革命の争亂が始まると、数十の争亂が各地に並発する。故に中国の革命はその戦亂による惨禍を被るのは全国民であるのに対して、その利を収むるの者は一部の支配階級に止る。これに対してヨーロッパのそれは革命の禍は一部特権階級に止まり、その結果は国民の大部分を益するのである。この差が中国人をして、革命を最も怖れしめる所以でもある。

(5)革命の時日を比較するに、ヨーロッパ社会に於ける革命はフランス革命に於ける恐怖時代を除けば、旧政府の倒れた後の新政府は善政を施行し、その争亂期間は決して長くは持続しない。然るに中国に於いては旧政府打倒の後の群雄が並起して、天下鼎沸し、旧政府倒れ、新政府がこれ等群雄を平定するのに長年月を要することは文明の破壊であり、民生の破壊である。即ち、

秦西革命、蒙革命之害、不遇一二年、而食其利者為百才、故有一度革命、而文明之程度進一級。中国革命蒙革命之害者、動百數十才、而食其利者不得一二年、故一度革命而所積累以得之文明、与之俱亡⁽¹⁰⁾

と述べ、従来の中国の革命の社会進歩に何等益

することなきを主張する。

(6)革命指導者を比較するに、ヨーロッパのそれは現在する悪政府のみを対象としているのに対して、中国革命に於ける指導者は現時の政府に対する以外に、革命家間の斗争が絶えず繰返される。彼は例を太平天国戦争にとり、最も近代的な革命と言はれるこの運動に於いても、党派内の争の為僅か十五年で、この中国最初の社会革命は挫折せざるを得ないことを指摘する。故に中国革命に於ける、革命指導者の人格に論及し、

吾前者屢言、非高尚嚴正、純潔之道德心者不可以行革命、亦謂此而已⁽¹¹⁾

と述べている。

(7)革命遂行と対外関係を見るに中国革命に於ける対外関係を五種の例をあげ、これ等直接的な外国勢力との関係以外に間接的な八王亂、十六ヶ国の乱等をあげ、現時帝国主義の東漸の時にあたり、中国の危機を救ふものは国勢を養ふことであるとする。

以上中国史上に於ける革命の分析による七点の特色をあげ、清末、列国帝国主義下の中国を救ふ方法は、果して、従来繰り返へされたる革命によるべきか、又革命によらずして中国は救はれるであらうか。この問題に対して彼は、

若後有革命等者起、而能免此七大惡特色、以入於泰西文明革命之林、則革命者、真今日之不二法門也⁽¹²⁾

と述べて、従来史上に現はれたる革命時に於ける七大特色なしに革命遂行が出来るならば中国革命こそが現時中国を救ふ唯一の道である。而して現時中国に於いて革命遂行を迷信する志士の懐く理想とこの七大特色とは相入れないものであるが、事実はこの特色を結果することなしには困難である。即ち、

吾見夫所欲用之以革命之多数下等社会、其血管内皆含黄巾闖獸之遺伝性也。吾見夫以第一等革命家自命之少数豪傑、皆之道德信義為蟲為毒、而其内部日々有揚韋搏之勢也。吾見夫高標民族主義以為旗幟者、且自附於白種景教、而僅其力以摧殘異己之党派、且

屢見，不一見也⁽¹³⁾

の如き現状に於いては革命による中国更新の方法よりも、有事に備へてその国力の充実こそが急務でなければならない。

中国革命史観を通じて現はれたる彼の革命観は暴力革命を否定し、ヨーロッパ諸先進国の革命を以つて理想的な革命形態となし、それへの漸進的接近に於いて中国救済の道を見出さんとす。故に当時革命前夜のロシアに於ける虚無党の運動に関しては次の様な見解を表示する。

虚無党之手段、吾所欽佩、若其主義則吾所不敢贊同也。彼党之宗旨以無政府為究竟……近世社会主義者流、以最平等之理想為目的、仍不得以最高專制之集權為終行……更申言之則虚無党之爭点、起於生計問題、而非起政治問題⁽¹⁴⁾

以上のロシア虚無党論に於いて見られるが如く

彼の革命観は生計（経済）と政治とを峻別し虚無党の革命運動は経済問題より発し、政治的には何等關係なしとする。かゝる考へ方は中国革命論に於いても随所に見られる所であり⁽¹⁵⁾

革命の内面的な把握に於いて明確を欠いている。彼が最初に規定した狭義の革命、即ち王朝革命は中国史上の著しい現象であり、又中国伝統の革命観は、この王朝革命を主体とした理論構成である故に、社会変革を中心としたヨーロッパ社会の革命との比較論に於いて、比較さるべき本質的な要素が部分的に分析分離せられてゐるのはやむを得ない。即ち階級論としての革命担当者の階級的性格の正確な分析、又は暴力革命を否定する場合の理論的根拠等は全く不明である。ヨーロッパ諸国家の革命の際に於ける暴力行為はその結果がよりよき社会を創造するものであり、比較的短期間なるが故に、これを是認せんとし、中国の場合は流血の惨、且長期にわたるものなる故に革命は嫌悪すべきであり、革命によつて中国を救ふことは困難であると結論することは、中国の旧き伝統との断絶に於いて、新中国を創造せんとする態度ではない。蓋し革命は旧き社会秩序がその社会の根本動力たる生産關係、所有關係を維持し得ない矛

楯打破の為の、力による旧秩序打倒と言ふ物理的現象と見るならば、崩壊しつつある旧中国社会の上に立つ清朝封建的支配形態は当然改むべきであり、革命は当然避け得べくもない。然るにも抱らず、彼が革命を否定しながら、而も中国救済を説く所以は如何、こゝに理想家ならざる彼の現実的な変革理論が唱へられるのである。

註：(1) 思想 335號 現代中國思想の史的概観

(2) 同上

(3) 小島祐馬 中國に於ける革命思想 p.95—97

(4) 飲水室葵卯文集卷 3. 7 中國歷史上革命之研究（以下省略して文集と記す）

(5) 團體革命の意義については彼は明確に規定していない。が

自希臘羅馬以迄近世、革命之大舉百十見、固非平民團體與貴族團體相斗争（文集卷 3. 7）より推義すれば支配、被支配階級の階級斗争の意の如く解されるが、彼が、かゝる階級斗争的な革命史観を有するとは考へられない。

(6) 文集卷 3. 中國歷史上革命之研究 3

(7) 文集卷 3. 同 上 9

(8) 中等社會については何等明確な概念規定をなさず、中等與下等之界線頗難劃（文集卷 3. 9）の如く更に下等社會との階級的差異について何等の説明を與へていない。

(9) 夫泰西史上之新時代、大率以生計問題為樞紐焉、即胎孕革命者此亦其重要之一原因也、故中等社會常以本身利害之關係、故奮起而立於革命之場、若中國則生計之與政治固絕無影響存也（文集卷 3. 9）

(10) 文集卷 3. 10

(11) 文集卷 3. 中國歷史上革命之研究 11

(12) 文集卷 3. 同 上 12

(13) 文集卷 3. 同 上 13

(14) 文集卷 3, 論俄羅斯虚無黨

(15) 註 5 參照

2. 變 革 論

彼が中国革命史論上に用ひた革命の意義については、これを Revolution の訳に用ひることを避ける。Revolution を革命の意に用ひたのは日本人にして、これは適訳にあらずとして次

の如く述べる。

Revolution 者……別造一新世界，如法国 1789年之 Revolution 是也。日本人訳之曰革命，革命二字非確訳也。「革命」之名詞始見於中国者，其在易曰，湯武革命，順乎天而応乎人，其在書曰，革殷受命，皆指王朝易姓而言，是不足以爲 Revolution 之意也⁽¹⁾

而らば Revolution を革命の意に解さない彼はこれに如何なる意味を与へるであらうか。Reform と Revolution の意義を次の如く説明する。

其事物本善而体未完法未備，或行之而失其本真，或經驗少而未甚發達，若此者利用 Reform。其事物本不善，有害於群，有望於化，非芟弗，蓋崇之，則不足以絕其患，非攻絃更張之則不足以致其理，若是者利用 Revolution。……其前者吾欲字之曰改革，其後者吾欲字之曰變革⁽²⁾

即ち變革，改革，革命の意義を彼が前に規定せる革命の三つの分類に従ふと最広義の革命と次広義のそれ，更に狭義のそれに相当するものと言へる。彼が變革を以つて Revolution の意に訳し乍ら且革命の語を用ひなかつた理由は，中国伝統の易姓革命との混同をさけ，以つて彼の平和革命を主張せんとするものなることは，其所謂變更云者，即英語 Revolution 之義也。而倡此論者，多習於日本，以日人之訳此語爲革命也。因沿而順之曰革命。……於是近今泰西文明思想上所謂以仁易暴之 Revolution 与中国前古野蠻爭斗界所謂以暴易暴之革命，遂變爲同一名詞，深入人々之胸中，而不可拔。⁽³⁾

と述べていることによつて明らかである。所謂革命をかくの如く變革，改革，革命と分けた彼は革命は中国現時の危機を救ふものにあらざることを主張せることは前述した。而してこの革命は狭義の革命即ち易姓革命なること勿論である。

然らば清朝末期の中国を救ふ道は改革なりや又變革なりや。彼は「革」の意義を次の如く解

している。

革也者天演界中不可避之公例也。凡物適於外境界者存，不適於外境界者滅，一存一滅之間，學者謂之淘汰。⁽⁴⁾

革を淘汰の意に解した彼はこれを更に二義を与へ，天然淘汰，人事淘汰と爲し，天然淘汰は外界に適せずして自ら滅亡するを言ひ，人事淘汰とは外界環境の變化に依じて，自己を之に適応せしめて自存せしめんとするもので，

人事淘汰，即革之義也⁽⁵⁾ と結論する。

人事淘汰にして適時外界一般の變化に依じて行はれるならば大きな革は起り得ない。即ち部分的な淘汰に於いて可能である。即ちそれは改革で已むのである。而し乍らその變化に処して大局を見るの明がなく，不適の癩が積蓄して根底よりこれを廓清せざれば自滅するに至る。この場合の根底よりの革これが Revolution であり變革であるとする。さて中国憂国の士には二派

が存在する。一派は温和主義であり一派は破壊主義である。これを彼は改革主義，變革主義とにあてはめて考へてゐる。現実的に清朝末期の中国を救ふ爲に種々の制度改革が唱へられているが彼はかかる部分的な制度改革では不可能とする。所謂改革主義に対しては，

如廢八股爲策論，可謂改革矣，而策論与八股何折焉，更進焉他日廢科舉爲學堂，益可謂改革矣，而學堂与科舉又何折焉，一事如此，他事可知，云改革，云改革更閱十年，更閱百年，亦若是則已耳⁽⁶⁾

と論じ，現時の中国を救ふ道は變革以外にあり得ないとし，中国積年の弊が積り，

降及現世，国之母財，才不增殖而宮廷土木之費，官吏苟且之費，恒數倍於政府之才入。国民富力之統計，每人平均額不過七角一分有奇，而外債所負已特十萬々兩，以至有限之物力而率變爲不可復之母財，若之何民之可以聊其生也。⁽⁷⁾

の如き清朝に対して，その救済方法としては Revolution 之事業爲今日救中国唯一無二之法門，不由此道而欲以圖存，欲以圖強，是磨甑作鏡，炊沙爲飯之類也。⁽⁸⁾

と述べ變革以外にその方法なしとするが、變革は最広義の社会革命を意味するものなる故に、具体的には如何なる變革が彼の意企する内容となるであらうか。

彼は變革に於いて更に二つの内容に區別する。即ち無主義(無意識)の破壊と有主義(有意識)の破壊とである。前者は部分的な小破壊であり、後者は全体的な大破壊主義である。即ち社会變革の理論的根柢を欠く反射的な反抗運動と、組織的、意識的な理論根柢に依る革命運動とを區別せるもので、現時中国に發生せる内乱はすべてこの小破壊である。而してこの小破壊運動が全国的に慢延せんとする時に取るべき變革はかゝる無主義の衝動的破壊運動であつてはならない。即ち彼はかゝる状態を次の如く論じ

此後之中国、其所謂小破壊、無意識之破壊不出五年、而必将編於国内、其時若以政府之力平定之善也。政府不能則定之者、不可不能国民、国民猶不能之則定者不得不頼外国。(9)

愛國の士はこの国家的危機に際し、最後の手段たる外国の勢力に依存して国家の維持を計ることを避け、小破壊の如き無主義の反抗形態に依らず有主義の組織的破壊を為すべきである。而るに中国の變革を唱へる人々は

今之中国、其能為無主義之破壊者、所至皆見矣。其能為有主義之破壊者、吾未見其人⁽¹⁰⁾の如く、大言して危機を呼んでも一定の主義のもとに破壊を為すものがない。唯国家の専制政治を批難し、清朝の圧力さへ除去されるならば中国は救済されると為しているが、自由の権利は各人が享有する所のものであり、清朝政府の無能を嘗る前に、我等の責任に於いて、よりよき政府を作るべきである。清朝の専制形態が民権の伸張を圧迫すると論ずる者がある。これ等論者は教育に於いても大衆の教育は民間の機関によることを主張し、自治機構に於いても中国大衆は租税、訟訴を除いて直接国家権力と交渉しない生活を為してゐる。海外商民(華僑)等に至つては現政府の何等関知する所ではないと論ずる。これに対して彼はこれ等は民権を享受せ

る形態ではなく、むしろ中国に於いては民権は奪はれてゐるものであり、この奪はれたる民権を回復することが先決問題であるとして次の如く論ずる。

以是例之、且使今日政府幡然改焉、頒憲法行政、舉立法行政司法諸大權、而一旦置我國民、我國民遂能受之、而運用自如耶、其有以愈於今日所享有之教育權者幾何也、其有以愈於前比山谷之民海外民所享有之自治權幾何也⁽¹¹⁾

彼の破壊主義(變革主義)は有主義の大破壊であり、現事の専制的な清朝政体を改めて三権分立に基く立憲国家となし、失はれたる民権を回復することを以つて變革の眼目とするのである。かゝる變革をかれは国民變革と称し、中国史上王朝革命は存在するが、未だ国民變革なしと、次の如く極言する。

若此者只能謂之數十盜賊之爭奪、不能謂之一國國民之變革昭々然矣⁽¹²⁾

而らばこの主憲主義を主張する彼は共和制国家か、又は君主制を温存すべきか。いづれを變革後の政体として要求せるであらうか。彼は国民變革と王朝革命との關係を次の如く観る。

君主者何者、其在一國中所占之位置不過億万分中之一、其榮也於國何与、其枯也於國何与、一堯去而一桀來、一紂廢而一武興⁽¹³⁾即ち王朝革命は社会革命たる国民變革の一現象に過ぎない。従つて国民變革は王朝革命なしにその遂行は可能であり、むしろ国民變革により君主は自存することを得るとして、

夫國民沈倫則於君主与当道官吏又何利焉、國民尊榮則於君主与当道官吏又何損焉、吾故曰、國民如欲自存、必自力倡大變革實行、大變革始、君主官吏而欲附於國民以自存、必自勿畏大變革⁽¹⁴⁾

大變革こそが国民、君主共存し得るものであるとする。かくの如く彼のの大變革とは立憲君主制を基本とし、且清朝下に於ける上からの民主主義的ブルジョア革命でなければならない。故に變革は必ずしも王朝革命(易姓革命)を必要とするものではないとし、

除法國主權屢變外，自余歐洲諸國王統依然⁽¹⁵⁾

と述べ、諸洲諸国、殊に日本の明治維新に論及し、次の如く論じている。

日本以皇統綿々万世一系自夸耀……其天皇今亦富尊榮神聖不可侵，又曾游東土者之所共聞也。曾亦知其所以有今日者 美食一度 Revolution 之賜乎。日人今語及慶応明治之交，無不指為革命時代，語及尊王討幕，廢藩置県諸拳動，無不指為革命事業⁽¹⁶⁾

即ち、日本は天皇制のもとに革命を遂行せるものであり、立憲君主制の最もよき例として指摘し、中国に於ける変革も諸先進国の如く立憲君主制を樹立することを以つてその指標とすべきであるとする。

以上の彼の変革論の概論に見られる如く、理論的に構成せられた革命論ではなく、現時の中国を救ふ政治論でもある。がこれ等の論を通じて見られる彼の革命観は彼自らが改革と区別して特に主張する変革に該当する如き内容を有するものではない。何故ならば革命を改革より区別させるものは、国家権力の担当者たる階級より従来の被圧階級がその権力を奪ひ取ることであり、それは同一階級の権力下に於ける単なる政権の変更でない⁽¹⁷⁾とするならば清朝政権の存在を認め、その下に於いて立憲国家を作らんとする事は、結果するものはブルジョア民主主義国家であつても上よりの改革であり、ブルジョア階級の国家的育成を待たざる限り、封建的勢力が強く温存されることは勿論である。

旧き伝統との完全なる断絶の上に変革を主張し得なかつた彼の意見は、改良主義的な清朝官僚イデオロギーを代表する革命観でしかあり得ない。この思想的基盤は次の新民説の中により明確に提示されるのである。

- 註：(1) 文集卷1. 釋革 4
 (2) 文集卷1. 釋革 4
 (3) 文集卷1. 釋革 5
 (4) 文集卷1. " 4
 (5) 文集卷1. " 4
 (6) 文集卷1. " 6

- (7) 文集卷1. 私德論 14
 (8) 文集卷1. 釋革 4
 (9) 文集卷1. 敬告我國民 3
 (10) 文集卷1. " 4
 (11) 文集卷1. " 2
 (12) 文集卷1. 釋革 5
 (13) 文集卷1. 釋革 5
 (14) 文集卷1. 釋革 6
 (15) 文集卷1. 釋革 5
 (16) 文集卷1. 釋革 6
 (17) 中村哲 近代革命理論(社會科學講座Ⅳ)
 P 115

3. 新民論

破壊主義を主張する彼は有主義のそれであることは勿論である。これら一部の破壊主義者が政府の圧政を取り上げこれを除去することを以つて変革と主張せるのに対して、自分の主張は然らずとして、次の如く述べる。

吾忠告之所能及，不得不限於少数国民中之最少數者，……今日蹉跎俊豸有骨鯁有血性之士，其所最目眩而醉心者，非破壊主義耶⁽¹⁾

単なる清朝打倒の破壊主義のみでは可能ではない。彼は清朝打倒後の政局担当の能力が中国大衆にありや否やを疑ひ次の如く述べ、

今愛国者，動輒曰，政府压制故民間不能展其力也。斯固然也。然使政府压頓去，我国民遂能組織一完備之国家子，吾有以知其不能也⁽²⁾

更に

今我国民果能應此時勢，而有定之之能力否乎，是吾所不能無疑也⁽³⁾

と述べ清朝専制政治打倒後の判然たる見透なしに単なる破壊主義のみでは目的は達し得ない。破壊は建設の為にあらねばならない。故に破壊はより高次の中国社会建設の為に遂行されねばならない。されば清朝打倒前に新中国建設の構想が明示されねばならない。梁啓超はこれを立憲国家に求めながら、尙且前途に於ける変革遂行の自信に対して疑問を示し、国民の遂行

能力に対して信頼を欠くのは如何なる理由によるであらうか。彼は次の如く考へる。即ち一国の社会組織は国家民族保持の必要に応じて構成されてゐる。故に中国の危機に際して、かゝる危機を内蔵する封建的国家より立憲制に変へることは比較的容易である。而し個人又は党に於いてそれぞれの主張を変へることは困難を伴ふ。殊に中国の国民性は長い間の歴史的特性⁽⁴⁾によつて大きな影響を受け現時の变革に際して、これを変へることは誠に至難であると。これが彼の主張する君主制民主主義革命にも抱らず、それと同時に国民性の变革をも主張する以所でもある。彼の新民説はこの根柢の上に展開される。封建組織によつて阻止せられた近代国家への発展を封建社会の否定の上に期待し、この新しい国家の実現は新民の道によつて達成せんとするものである。

従来大革命には指導的人物が必要であり、英国革命に於けるクロムウェル、米國革命に於けるワシントン、日本維新に於ける吉田松陰、西郷南洲をあげ⁽⁵⁾建設を目的とする破壊には大人物の必要を論じ、かゝる指導的人物を有さざる例としての太平天国に於ける洪秀全⁽⁶⁾をあげ、該下の急務にも抱らず新しい人間像の建設こそが、变革の最大眼目とし

惟中国前途懸於諸君，故諸君之重視道德与蔑視道德，乃国之存亡所由繫也⁽⁷⁾

と述べ、一切の变革の根柢として人間变革を次の如く論ずる。

今日稍有知識，稍有血性之士，對於政府而有一重大敵，對於列強而復有一重大敵，其所以競々業々蓄養勢力者，宜何故……實力安在，而道德為先師，無道德觀念以相勉，則兩人且不能為群，而更何事之可圖也⁽⁸⁾

以上の如く彼は新中国建設の最根柢として人間变革を主張するが、人間变革の指導原理となる新道德の樹立について、彼は前に儒教主義によることの誤りを主張せることを取消し⁽⁹⁾各民族社会にはそれぞれ固有の道德あり、それを中国社会に適用せんとすることは誤りであるとし、

苟欲行道德也，則固於社会性質之不同，而

有所受其先哲之微言，祖宗之芳躅，隨此冥然之軀殼，以遺伝於我羣，斯乃一社会之所以為養也，一旦突然欲以他社会所養者，養我談何容易耶⁽¹⁰⁾

と論じ

今日所持以維持吾社会於一線者，何在乎，亦曰祖宗遺伝固有之旧道德而已⁽¹¹⁾

と中国固有の旧道德の中国社会に果せる点を看過すべきではないとし、更に

夫言群治者，必曰德曰智曰力，然智与力之成就甚易，惟德最難，今欲以一新道德易国民，必非徒以区々泰西之学説所能為力也⁽¹²⁾

と新民の道としての新道德は必ずしもヨーロッパの諸学説に基くべきではないとし、

觀近今新学界中，其断々然提絜德育論者，未始無人，然効卒不睹者無也焉。彼所謂德育蓋始終不離于智育之範圍也⁽¹³⁾

とヨーロッパ諸学説を批判し、智育は同時に道を得ることでなければならず、德育こそが最も肝要である。中国の識者はヨーロッパ学説を入れることに急であつて之を道と為すことを敢へて為さず、自由論を唱へるものは幸福を増すことなく秩序を破り、平等の説が入り義務を遂行せず権利のみが主張され、革命論が入り破壊を事と為して国粹は亡びんとしている。これ等の学説はヨーロッパに於いては社会生活によく適応され、生活の中に生かされている。これは彼の国に於いては智育と德育とが一体となる為である。而るに中国に於いては

泰西之民其知与徳之進歩為正比例，泰東之民其知与徳之進歩為反比例⁽¹⁴⁾

の如き状態であり、

為学日益，為道日損⁽¹⁵⁾

がその実態でもある。

かゝる状態より脱して、彼が新民として画く新中国にふさはしい人間像を次の如く要求する。先づ中国国民性最大の欠点を指摘し、吾觀我祖国民性之欠点不下十百，其最可痛者，則有若無毅力焉也⁽¹⁶⁾

と述べ毅力、即ち進取の氣象の足らざることをあげ、毅力は個人、民族等に於いて進展の動力

となるものであり、史上偉大なる民族はすべてこの毅力を以つて目標達成に努力せるものであるとし、英国のクロムウエル以来の通商殖民が今日の大英国をいたせし所以であり、帝政ロシアがピーター大帝以来の東方侵攻こそが今日の強大を為せる所以であるとし

全球数十國中其有朝氣方鼎盛者不過十數、
揆厥所由、未有不自彼國民之有毅力來者也⁽¹⁷⁾
と論じ、更に毅力を剛毅、沈毅の二種⁽¹⁸⁾に分け、現時の中国には剛毅の士あり、国家的危機を救はんとするが、その行動は決して愛国的行動ではないと次の如く論じ、

吾國民之為此者、何以一呼而蜂蟻集、一闕而鳥獸散、不顧大局而徒以累國家也⁽¹⁹⁾

更に中国維新を唱へる愛国の徒と雖も、以つて國に殉ずるの意志なく、一身の保全と利益とを主とするものであるとなし、

嗟乎一國中朝野上下人々、皆假日嬉樂之心有違恤我後之想、翩翩年少弱不勝風、翩翩老成戶居余氣、無三年能持續之國的、無百人能團結之法國、嗚呼有國如此、不亡何待哉⁽²⁰⁾

と述べ、愛国心の欠除を憂へる。即ち現中国に於いては剛毅の士あれども殉国の士なし、所謂沈毅の士なし。新民の士は沈毅愛国の士ならざるべからずと見做す。彼はこの毅力を以つて公德(国民道德)となし、中国に於いて毅力、殊に沈毅の士なきは私徳(個人道德)の不振にありとする。

この公德と私徳との關係については、
公言、私言、不過仮立之一名詞、以為體驗踐履之法門、就汎義信之則徳而已、無所謂公私⁽²¹⁾

と述べ、公德、私徳を原則的には認めてはいない。然し乍ら公德と雖も大衆がこれを育成するにあらざれば、その効を發探することが出来ない。而も群は百十億の私人によつて構成されるものなる故に、私人にして道德に聳であり、怯であるならば、公德はあり得ない。故に国民道德たる公德を振興せんとするならば、先づ私徳を振興すべきであるとし、次の如く

是故欲鑄國民、必以培養簡人之私徳為第一義⁽²²⁾

主張する。

而して中国に於いて私徳興らざる原因については五つの理由⁽²³⁾をあげ、長い専制政体が中国民族を卑屈にし、歴代覇者の淫乱が中国民俗を墮落せしめ、これに対して中国近世の儒学が匡救する能力を欠いていることを指摘し、殊に歴代の戦乱が民族性を更に歪め、就中国内戦争がその国民性に与へる六種の悪性⁽²⁴⁾を指摘し中国従來の旧道德に対して、正本、狼独、謹少の三項目をあげて新道德の根底となし、これの實踐の上で新民を生み出すとするのである。

彼の唱へた新民説は一人の人間が新たになることではなく、又一人の力で新らしくなることではなく、国民全体が新らしくなることである。この新民の實現の爲には新しい國家の實現が併行せらるべきであり、立憲君主主義による以外には新民の實現を期し得る方法の困難を指示し、更に中国救済の方法はこの新民以外にはあり得ないと主張する。

結局彼が描いた新民像とは具体的には如何なる人間像であつたか。新民を生み出す新國家が改良主義的な立憲君主國家を理想とする如く、彼の理想像は公德、ことに沈毅によつて中国を救はんとする愛国の士であり、その愛国心とは彼がモデルとするロシア帝國主義時代のそれであり、英国發展時代の自由主義を基調とする侵略的なものである。新中国が富國強兵を目標とする上よりの改革によつて成就されねばならぬと観る如く、中国の新民は帝國主義的民族觀を基調とする新道德によつて形成されねばならぬと考へられる。

彼が日本、ドイツ、フランス等の發展が戦争による民族感情の愛国的結合によることを強調し、中国愛国心の鼓吹、即ち新民形成の一手段として對外戦争を高く評價せる点⁽²⁵⁾は彼の理想とする新民を最もよく象徴せるものである。

唯彼がこの公德の基底に個人道德を認め、それを儒教的徳目によつて規定せんとした所に新

民説の時代的制約をも併せ示すものである。

- 註：(1) 文集 卷1. 論私徳 17
 (2) 文集 卷3. 敬告我國民 2
 (3) 文集 卷3. " 3
 (4) 後註6参照
 (5) 文集 卷1. 論私徳 18
 (6) 始洪秀全、或以其所標旗幟、有合民族主義也而相與頌揚之、究竟洪秀全果爲民族主義而動否、雖論者亦不敢作保證人也。
 (文集卷1. 18)
 (7) 文集 卷1. 論私徳 18
 (8) 文集 卷1. " 19
 (9) 後註18参照
 (10) 文集 卷1. 論私徳 18
 (11) 文集 卷1. " 18
 (12) 文集 卷1. " 17
 (13) 文集 卷1. " 20
 (14) 文集 卷1. " 20
 (15) 文集 卷1. " 21
 (16) 文集 卷1. 論毅力 9
 (17) 文集 卷1. " 9
 (18) 吾嘗謂毅力有二種、一曰競揚於成敗而全力以赴之、鼓余勇以繼之者剛毅之謂也、二曰解脫於成敗而盡天職以任之、生命以殉之者沈毅之謂也。(卷1. 9)
 (19) 文集 卷1. 新民説 10
 (20) 文集 卷1. " 10
 (21) 文集 卷1. " 11
 (22) 文集 卷1. " 11
 (23) 五因として次の五項目をあげる。
 1. 由於專制政体之陶鑄也。
 2. 由於近代霸者之摧斃也。
 3. 由於屢次戰敗之挫沮也。
 4. 由於生計憔悴之逼迫也。
 5. 由於學術匡救之無力也。
 (文集卷1. 論私徳2. 私徳墮落之原因)
 (24) 六種の悪性とは、
 僥倖性、残忍性、傾軋性、狡偽性、涼薄性、苟且性
 (25) 彼は對外戦争を否定せず、國民精神作興に力

あることを言ふ。

故有利用敵國外患、以爲國家之福者、雖可悲而非其至也。(文集卷1. 3)

結 び

公羊学派の流れをくむ変法自強派は世界主義的な立場に立つ。この点異民族支配を否定しない。この事は中華思想の逆的な表現でもある。故にその革命論は現実的には清朝支配を肯定する。而も彼等の下級官僚的地位は清朝専制形態の徹底的な打倒を中断する。デスポテズムに対する改良主義的な立憲君主制の下に自己の有する社会的地位を温存せんとする。

かゝる一般的背影に立つ梁啓超は中国革命の分析の中より易姓革命と社会革命とを区別し、社会革命は必ずしも易姓革命に依らずして可能なることを指摘し、清朝王制を立憲制に変革することによつて中国革命は達成し得るとする。その場合社会革命を可能ならしめるものは國民精神の振興であり、愛国心が彼の新民の条件として要求される。

富国強兵が強く要求された清朝末期、民族主義に徹するを得ないこれ等変法派は清朝王政下の立憲主義によつてこれに応ぜんとしたのである。これは変法派と同じく清朝デスポテズムの圧制より離脱せんとする民族ブルジョアジーを代表する孫文派との違いである。この差は在野の孫文に対して清朝デスポテズムに寄生せる彼等の階級的な性格を示すものであり、この体制の崩壊と共に孫文派の三民主義に圧倒されざるを得なくなるのは当然である。

故に変法派を代表する梁啓超の変革論は、西洋中体論の中華思想に基く民権否定の改良主義より、孫文の民族主義的革命に至る過渡的段階に於ける、清朝専制政治に対する変革論であり世界市民的民権論を基礎とせるものである。